

野分

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1907) 「ホトトギス」
参考：『坊っちゃん』1906)
監督：山本嘉次郎(1935) 丸山誠治 (1953) 番匠義彰(1958)
市村泰一(1966) 前田陽一(1977)
主演：宇留木浩(1935) 池部良(1953) 南原伸二(1958)
坂本九(1966) 中村雅俊(1977)

白井道也は文学者である

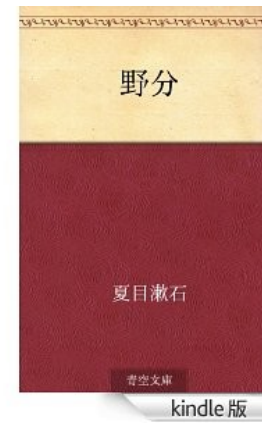
『野分』は『吾輩は猫である』『坊っちゃん』に続いて「ホトトギス」に掲載された。世評は先行する二作品に比べてあまり高くない。私もこれまで無視していたが、読んでみると結構面白い。

どこが面白いかというと、『坊っちゃん』に似た雰囲気が漂っているところだ。主人公の白井道也は文学者である。数学の先生の坊っちゃんとは専門が違うが、無鉄砲で損ばかりしているところは似ている。二人とも田舎の中学を追われるようなかたちで辞め、東京に戻ってくる。

ただし、坊っちゃんが飄然として去ったのは伊予松山の中学だけだが、白井道也は八年前に大学を卒業してから越後、九州、中国辺の田舎の三中学を流して歩いた末に東京に舞い戻ってきた。その間に結婚して妻がいる。

主人公が独身ではなく、妻帯者という設定。これでは『坊っちゃん』のような青春文学の面白さは期待できない。『野分』が映画化されたことがないのはそのせいでもあると思うが、『坊っちゃん』の続篇と考えれば小説としては興味が増す。

田舎の中学を辞めた坊っちゃんは、街鉄の技士になるが、彼のような一本気の性格では街鉄の技士も長続きするかどうか心配だ。いずれ妻帯するだろうが、妻帯してから失業するおそれもある。その場合は、白井道也の境遇のようになるのではなからうか。



野分

映画文学人生論

道也の毎月の収入は江湖雑誌の編輯で二十円、英和辞典の編纂で十五円、その他に新聞・雑誌に原稿を書いて、たまに二円か三円の報酬がある程度。坊っちゃんの初任給が四十円だったから、道也は中学の先生よりも稼ぎが少ない。

しかし、彼は金を目安にして人物の価値をきめる訳にはいかないという。学問（文学）をする者の理想は金ではない。学問は金に遠ざかる機会である。学問をして金をとる工夫をするのは北極へ行つて虎狩りをするようなものだという。

本人は物質的に報われない文学の述作的努力のうちに生甲斐を感じているからよいが、家計のやりくりをする妻君は金がないと困る。

そのうちに百円の借金ができて、返済の期限が迫つてきた。著書が売れば、百円や二百円はなんとかなると道也は言っていたが、どの本屋にも出版を断られて著書が売れない。ついに借金取がやってきて、どうあつても今夜中に返してくれと矢の催促。道也先生は黙然としている。

そこへあらわれたのが道也を尊敬する貧しい文学者高柳周作。病身の彼は金持の友人から転地療養をすすめられて、これから執筆する傑作の原稿料として百円貰っていた。その百円で道也の著書『人格論』を譲ってくださいと申し出たために道也は窮地を脱した。人格の沙汰も金次第か。

枯野分文士は食わねど高楊枝